TADOKU JUNIOR 自然のふしぎ神話 ★★★☆☆ ふつう 365語

The Poplar Tree

ポプラの木

Flora J. Cooke（1895年の本） 原文そのまま 朗読：Linette Geisel

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ おじいさんが、にじのはしで見つけた金のつぼを、ポプラの木の葉の中にかくしました。次の朝、なくなったことに気づいた神さまたちは……。

One night, just at sunset, an old man found the pot of gold which lies under the end of the rainbow.

His home was far beyond the dark forest, through which he was passing.

The pot of gold was heavy, and he soon began to look for a safe place in which to hide it until morning.

A poplar tree stood near the path stretching its branches straight out from the trunk.

That was the way the poplar trees grew in those days.

“Ah,” said the man, “This tree is the very place in which to conceal my treasure.

“The trees are all asleep, I see, and these leaves are large and thick.”

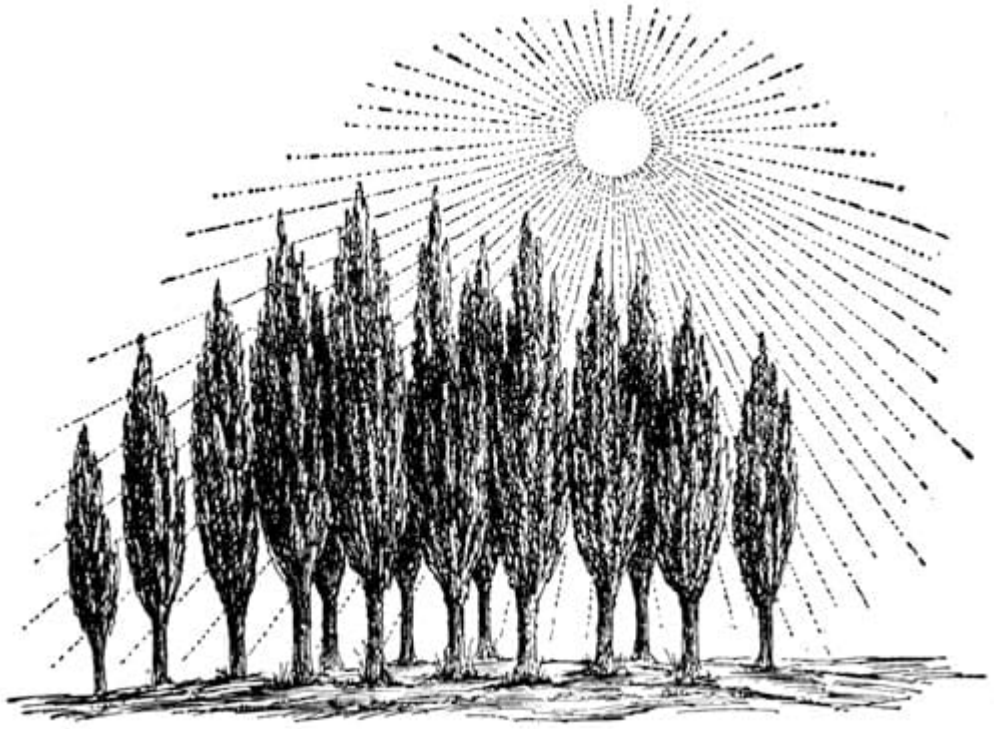
He carefully placed the pot of gold in the tree, and hurried home to tell of his good fortune.

Very early the next morning, Iris, the rainbow messenger, missed the precious pot of gold.

She hastened to Zeus and told him of the loss.

Zeus immediately sent Hermes in search of it.

Hermes soon came to the forest where it was hidden.



He awakened the trees, and asked them if they had seen the pot of gold.

They shook their heads sleepily, and murmured something which Hermes could not understand.

Then Zeus himself spoke to them. “Hold your arms high above your heads,” he said, “that I may see that all are awake.”

Up went the arms, but alas, down to the ground came the pot of gold.

The poplar tree was more surprised than any one else.

He was a very honest tree and for a moment hung his head in grief and shame. Then again he stretched his arms high above his head, and said, “Forgive me, great father; hereafter I shall stand in this way that you may know that I hide nothing from the sun, my king.”

At first the poplar tree was much laughed at.

He was often told that he looked like a great umbrella which a storm had turned inside out.

But as years went by every small poplar was taught to grow as fearless, straight and open hearted as himself, and the whole poplar family became respected and loved for its uprightness and strength.



あるばん、ちょうど日がしずむころ、ひとりのおじいさんが、にじのはしの下にあるという金のつぼを見つけました。

おじいさんの家は、今通っているくらい森の、ずっとむこうにありました。

金のつぼは重かったので、おじいさんはすぐに、朝までかくしておける安全な場所をさがしはじめました。

道のそばに一本のポプラの木が立っていて、えだをみきからまっすぐ横にのばしていました。

そのころのポプラは、そういうふうに育っていたのです。

「ああ」とおじいさんは言いました。「この木こそ、わしのたからをかくすのにぴったりの場所だ。

「木はみんなねむっているようだし、この葉は大きくて、しげっている。」

おじいさんは金のつぼを木の上にそっとおいて、自分の幸運を話すために急いで家に帰りました。

次の朝とても早く、にじの使いのイリスが、大切な金のつぼがないのに気がつきました。

イリスは急いでゼウスのところへ行き、なくなったことを話しました。

ゼウスはすぐに、ヘルメスをさがしに行かせました。

ヘルメスはまもなく、つぼがかくされている森にやって来ました。

ヘルメスは木々を起こして、金のつぼを見なかったかとたずねました。

木々はねむそうに首をふって、ヘルメスにはわからないことを、何かぶつぶつ言いました。

そこで、ゼウス自身が木々に話しかけました。「みんな、うでを頭の上に高く上げなさい」とゼウスは言いました。「みんなが起きているか、たしかめられるように。」

うでが上がりました。ところが、ああ、金のつぼが地面へ落ちてきたのです。

だれよりもおどろいたのは、ポプラの木でした。

ポプラはとても正直な木だったので、しばらくのあいだ、悲しくてはずかしくて、うなだれていました。それから、もう一度うでを頭の上に高くのばして言いました。「おゆるしください、えらいお父さま。これからは、わたしはこうして立っていましょう。わたしの王である太陽に、何もかくしていないことが、わかるように。」

はじめのうち、ポプラの木はずいぶんわらわれました。

あらしでうら返しになった大きなかさみたいだ、とよく言われました。

けれども年月がたつうちに、小さなポプラはみんな、ポプラと同じように、こわがらず、まっすぐに、心を開いて育つように教えられました。そしてポプラの一族はみんな、そのまっすぐさと強さで、うやまわれ、あいされるようになったのです。

たんご と クイズ ポプラの木

rainbow にじ	**forest** 森	**pot of gold** 金のつぼ
poplar tree ポプラの木	**leaves** 葉	**umbrella** かさ

Q1 おじいさんは、金のつぼをどこにかくした？

① 土の中　② 川の中　③ ポプラの木の上

Q2 ゼウスが木々に言ったことは？

① うでを頭の上に高く上げなさい　② 葉を全部落としなさい　③ 目をとじなさい

Q3 ポプラが、うでを上にのばして立つようになったのはなぜ？

① 高い所がすきだから　② 太陽に何もかくしていないことを見せるため　③ 雨をたくさんあびるため

こたえ

Q1 ③ 大きくしげった葉のあるポプラの木の上に、金のつぼをそっとおいてかくしました。

Q2 ① みんなが起きているかたしかめるため、うでを高く上げるように言うと、つぼが落ちてきました。

Q3 ② 正直なポプラは、王である太陽に何もかくしていないことがわかるように、うでを高く上げて立つことにしたのです。

原田英語の多読ベストジュニア
本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。
haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #30800（Flora J. Cooke、1895年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1895 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Linette Geisel（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。